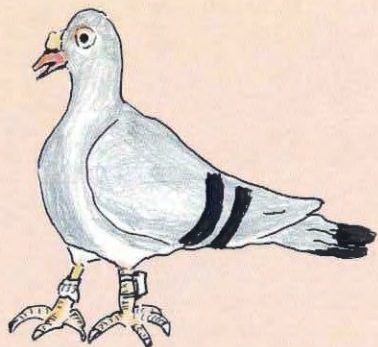




「猫」と「鳩」



はじめに

ある日のこと。

八〇才になっても好奇心いっぱいのおきちゃんが、テレビを見ながらふと話し出しました。

「ちょっとね、あの脳科学者の茂木健一郎さんに、聞いてみたいことがあるんだよ。」

「昔のことは、いくらでも語れるのに、今のことはすぐ忘れてしまう。」

そんな脳の仕組みが、どうなっているのかと想ってね。」

話は、そんなきっかけで始まりました。

茂木健一郎（もぎけんいちろう、昭和三十七年生まれ）「クオリア」（感覚の持つ質感）をキーワードとして脳と心の関係（心脳問題）についての研究を行っている。

ときちゃんが小さい頃の東京。

庶民の住居といえ、ほとんどが木造建築でした。木造住宅の場合、屋根と天井の間に空間があり、床下にも空間がありました。隙間すきまだらけの構造です。そこは、小動物「ねずみ」達の生活の場であり、遊び場にもなります。夜行性のチュウ太郎(ねずみ)は、暗くなるとそこそことかけ回り、親ねずみはこみ置き場でえさを探し、天井裏では子ねずみたちが運動会のように遊んでいるという毎日でした。不衛生なチュウ太郎と離れたくても離れられないちよっと困った人々の暮らしがありました。

しかしながら、人間には猫を飼ってチュウ太郎を退治するという妙案があったのです。

もともと猫はねずみを捕獲ほかくさせる目的で飼われはじめた山猫の家畜化かちくかであるといわれています。すぐれた平衡感覚、柔軟性、瞬発力のきわめて高い体の構造です。そのうえ足音は小さく、体臭も少ないところが飼い猫の人気のひとつだったのでしょう。

そして、鋭いツメを持ちながらも自由に出し入れができました。ときちゃんはよく、猫たちが獲物を取るためにツメを出してといている姿をみました。

「とき、ねずみを退治する猫だったら飼ってもいいよ」おおかあさんは、そう言いました。ときちゃん
はさっそく近所のおばあさんに猫の見分け方を教えてもらい、子猫を一匹もらいました。

新しいお友達ができたことを、ときちゃんはとても喜びました。

猫も色々で、獲物を捕るために生まれてきたような猫と、そうでない気弱で優しい猫もいます。
その頃の優秀な猫とは、ねずみを捕ることができると。

猫の首根っこをつかんで持ってみたときにファイティングポーズをとる猫は、見込みがあります。

そんな猫は、目もぱっちりしており見るからに精神せいじんです。

その優秀な猫は空中に放り投げると、回転しながら華麗華麗にぴたっと四足よっあしで美しく着地をしますが、

そうでない猫は、ずどんと体たいごと落ちてしまいます。それが面白くて、観察をしたくて、ときちゃんは
何度も放り投げました。猫にとっては迷惑な話です。

余談よだんですが、ダメ猫にも生きる道はありました。

首に大きな鈴をつけてあげると歩くたびに音がします。チュウ太郎は、その音で、寄ってこなくなりま
すから。

近所のおばあさんは、いたずら好きのときちゃんに、もうひとつ大事なことを教えてくれました。

「猫のヒゲは、切ったらだめだよ」と。

猫の長いヒゲは、アンテナであり高感度センサーになっていて暗闇でもねずみを追いかける事ができます。ヒゲで顔周辺の物との距離をすばやく測るため、草木の間や天井裏の狭いところでも自分の顔をあちこちぶつけることはありません。

飼い猫のいつもの食事は、「ご飯に、だしをとったあとのかつお節をのせたもの。

ある日、ときちゃんの前に飼い猫が、何かをくわえてやってきました。よく見ると、獲物(ねずみ)をみせにやってきたようです。人間と同じで、ほめてもらいたい、ほめられるといっそう活躍するようです。とつやが今日の食事は、「馳走(ちせう)のようです。」

ロンドン五輪に沸いた平成二十四年夏。

体操のエース・内村航平選手は、個人総合で見事金メダルを獲得しました。テレビを見ながら、その内村選手に「髭(ひげ)がはえているー」と言い出したのは八十一歳のときちゃんでした。

若い男性なので、ヒゲくらいはえている訳ですが、その時、ときちゃんには、内村選手があ頃の空中に舞う優秀な名猫に見えていたのです。「ネコのヒゲ」ということですね。

ときちゃん小さい頃、おうちの屋根の上には鳥小屋があり、お兄ちゃんが「伝書鳩」を飼っていました。

伝書鳩は、神社や街の中にいる「土鳩」より2まわりほど大きく、羽が強いいため長距離を飛ぶことができます。昔は、通信手段として訓練され、折りたたんだ書簡を鳩の足にとめて運びました。当時は新聞社や軍隊に利用され、なくてはならない存在のひとつとして活躍をしていました。電子機器が発達した今では、考えられないことですな。

そんなわけで、上流社会やお兄ちゃんが通う学校では「伝書鳩倶楽部」が存在し、流行っていたのです。小学生のときちゃんは、朝起きるとすぐ鳥小屋へかけ上がります。かわいいお友達です。

さっそく餌の準備をはじめます。白えんととう豆を中心に、あさの実、とうもろこし、貝がらをくだいたものを混ぜ合わせます。

ぼっぼー、と鳩たちが嬉しそうに鳴きはじめます。くちばしを強くするために、レンガもくだいて混ぜます。お米は強すぎてお腹をこわしてしまいます。

伝書鳩はかしこく、また夫婦仲がよく卵を2個(オス・メス)生み大事に育てます。

足には、番号のついた足輪を着け、名前をつけます。

なぜ、伝書鳩は、長距離飛び続けて書簡を運ぶことができるのでしょうか？

ひとつは訓練です。そして、「帰巢本能」きそうほんのうを利用します。家に帰れば餌がある、と仕込んでいきます。

いつものように伝書鳩の訓練をしていた戦争中のある日、軍人さんが、ときちゃんの家に行ってきた。お国のため、伝書鳩たちにも協力をして欲しいと。優秀な教羽が、連れて行かれました、さようなら。きっと、通信手段として軍隊で活躍したことでしょう。光栄ではありながら、ちょっとさみしいときちゃんでした。

やがて、ときちゃんの家も米国軍べいこくぐんの飛行機による東京空襲で、焼けます。

炎の中をみんな命がけ、必死で家をでます。そのとき、鳥小屋のとびらは開けられました、「さあ飛んでお逃げ！君たちには翼があるんだから」伝書鳩たちは、飛んで行きませんでした。

そこが家であり、逃げることはできませんでした。

帰巢本能がそうさせたのでしょうか？火の粉におびえたのでしょうか。

焼け跡にたたずんだときちゃんのほほを、涙が流れました。雪の合間から春の陽射しが、悲しんでいるときちゃんをなくさめてくれました。

八十一歳のときちゃんは靖国神社の境内で、白い鳩たちを目を細めながら穏やかなまなざしでみていました。我が家の伝書鳩たちも、ここ靖国神社に祀まつられています。

あの頃を思い出しながら、かわいく賢い友たちでありながら、お国のために命を捧げた伝書鳩を慰めます。

靖国神社へ参拜さんぱいにきている人に「ここに鳩が祀まつられていることを知っていますか？」と、いつものように小さな好奇心こうきしんに満ちたメガネの中のひとみで、静かに問いかけます。

いつまでも忘れないで欲しい、と和やかにお話しをしていたと思ったり、そよ風が吹きました。あれ？いつのまにかときちゃんが消えてしまいました。

呼びかけるように、ぽっぽーと境内の白い鳩が鳴きました。

鳩がメガネをかけているよ、いつの間にかときちゃんは鳩になってしまいました。

おわりに

つきなみですが、この冊子は両親に贈ります。

父は自伝を出したかった訳ですが、私にはこれが精一杯といえるでしょう。

母は残念ながら三年前に他界しましたが、天国から私への最後のレッスンは、「父ともっと話したら」というものではないかしら？と想像しました。というのは、父娘は、何十年もほとんど会話をしませんでしたから。私事になりましたが、お許し下さい。

思いがけずこのたび、父の話を聞きながら、このようなものを作りました。

今や遠い昔となりますが、戦前の東京における庶民生活の香りが伝わることを願っています。

また、動物たちのお話しなので、子供たちにも読んでもらえたらと思います。

最後に、制作にかかわった方々に感謝します。ひとりでは何も出来ませんので。

東京・駒込にて、平成二十五年夏 猛暑

お話と絵 原口時夫

文 原口久美子

